子どもを歌つた大隈言道

三津迪

わが國の古い歌に子どもを歌つたものゝ少いことは、すこしでも昔の歌集などを見た人には容易に察せられることでありませう。勿論萬葉集には、山上憶良の「子等を思ふ歌」とか「老身重病年を經て辛苦す、及び兒等を思ふ歌」とか「男子名は古日を戀ふる歌」とか、よく引用せられる名歌がありますし、下つては、源實朝の「物いはぬ四方のけだもの」や「いとほしや見るに涙」など知られた歌がありますが、それらはきはめて異例なのであつて、平安朝以後歷代の勅撰集や家の集にはまづほとんど見當らないのであります。これには色々の理由が考へられますが、最大の原因は、その當時の歌の觀念と言ふものが子どもを對象とするにはひどく遠いところにあつたからであらうと思はれます。第一、一般に素材の如きもすこぶる限定された範圍から取りあげてゐたに過ぎぬのであります。花と言へば、梅櫻、鳥と言へば鶯郭公といつた風で、稀にすぐれた歌人があつても子どもの生活といふやうなことが歌はれることはほとんどなかつたのであります。かう言ふ傳統的な觀念は、おほざつぱに言つて古今集以後江戸時代の前期までながく續きましたが、この頃、御承知の釋契沖とか荷田春滿とか賀茂眞淵とか言ふ人々が現れて傳統的なものを理論的に解剖して和歌の本質とでも申す事柄を究明するやうになりました。こゝで當然、題材なども問題になり、從來の狹く觀念的な考へが、ずつと擴げられるに至つたのであります。併し、その謂はゞ新人たちである春滿とか眞淵とか又は本居宣長とかは、やはり學者であつて歌人ではなく、理論的には新味のある見解をたてはしまんたものゝ、結局、

萬葉集とか古今集とか或は新古今集とか古い歌集に自然目標をおいて作歌しましたから、充分なる和歌革新はできませんでした。また續いて小澤蘆庵や香川景樹などが出て、更に徹底した意見のもとに新しい和歌を提唱しましたけれども、これも結局は古今集を宗とするところに歸着して、なるほど或る程度の革新はできましたが、まだ我々を肯首させるに至らなかつたやうであります。しかるに、幕末ずつとおしつまつてから出た歌人たちに、なまじつか歌論などゝ言ふ理窟をのべたてない人たちがあり、その中に本當に我々を動かす人のあることを注意すべきでありませう。これは一つには先人の唱へた和歌革新の意見が本當に浸潤した結果でもあり、またそれを實行すべき本當の創作家が出たゝめでもあると思ひますが、これより述べます大隈言道もその一人なのであります。

言道は寛政十年福岡の生れ、明治元年七十一歳にして歿しました。早くから文事に從ひ主として藩士二川相近に歌と書とを學んだのでありますが、中年から歌に獨自の考へを持つに至り、貧困のなかからよく作歌に沒頭した人であります。「ひとりごち」（安政四年成）と言ふ隨筆の中で言道は、自分は天保の民であるから天保の歌をよむ、古人に執してその糟粕は嘗めないとか、雲上人の束帶したやうな歌ばかりが歌ではないとか言ふ意味のことを言つてをりますが、確かに面白い意見だと思はれます。かう言ふ考へから言道の詠みました歌は實に輕妙なものが多い。しかも全體として、深沈たるものは見られない代りに、平淡な明るさがみなぎつてゐるのであります。用語にしてからがきはめて自由で、俗語風の言ひ方もどし〳〵用ゐてゐる。かう言ふ風でありますから題材も自由に廣く色々なものを扱つてをります。もつとも我々の作歌に就ての考へ方から言へば、これは當然のことでありますけれども、所謂舊派に屬する歌人歌壇の當時の狀態から見ると餘程これが變つてもゐるし、またすぐれても居たのであります。

一體、子どもを歌に扱ふと言ふのは、子どもに對して興味を感じてゐなければ出來るものではありますまい。殊にその生活的なものを歌ふのは、歌ふ大人自身に子ども的なものがなければならぬと思ひます。我々は童心歌人として

よく良寛の話をきゝますが、良寛が子どもを扱つて多くのすぐれた歌を殘したのも、例へば、一晩中隱れんぼをしてゐたと言ふやうな痛快な逸話によつて知られるあの無邪氣な日常生活を思ひますと、全く無理のないところと思ひます。また我々は一茶を知つてをりますが、あの不運な生活と、そのために狷介であつた性質の中にもたしかに子どものやうな心のあつたことは、傳へられた諸々の話によつて充分うなづけると思ひます。さうでなくては「ぶらんこや櫻の花をもちながら」だとか「これほどの牡丹と仕方する子かな」の如き句はどうしてもでゝ來なかつたと思ひます。また我々は、しば〳〵言道と竝んで論ぜられる志濃夫廼舍橘曙覽を見ますと、「こぼれ糸網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす」だの、例の獨樂吟の中なる「たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましうましといひて食ふ時」などがありますが、やはりこれも、その奇骨稜々たる性格の中に如何にも素直な童心的なものゝあつたことを思へば蓋し自然の結果でありませう。

そこでしからば言道の子どもの歌はどうであるかを考へて見たいと思ひます。一體、言道の歌集には南櫻集・篠舍集・鳥居集・今橋集・戊午集など色々ありますが、もつとも代表的なものは文久三年に刊行された草徑集であらうと思ひますから、こゝでは便宜この草徑集を見ることにいたします。まづ

童ごちわろびたはぶれ一つだにさけば摘みとるきちかうの花　桔梗　上卷

里中に遊ぶをとめは結ぼれの解くる帶だにみも知らずして　少女　中卷

の二首を見ますと、これは一見平凡のやうでありますが、前の歌の「わろびたはぶれ」、後の歌の「みも知らずして」と言ふ表現は、無雜作のやうでありながらなか〳〵苦心したものではなからうかと思ひます。元來、言道はその作歌に實に推敲を重ねた人で、語句の訂正は勿論、自分の歌に自分で善惡の評を書添へて見たり、きはめて多くの草稿の中から嚴選の結果家の集を編んだりして些かもおろそかにしなかつたもので、この想像は失當ではないと考へます。しかも、これらの言葉が子どもの樣子をまことによく描寫し

てゐる、例へば、この頃の日本畫に好んで用ゐられる村の子どもの繪にでもありさうな構圖だと思ふのであります。殊に前者にはどこかおどけた調子も見られ、そのために一層童話的氣分も窺はれるやうに思ひます。これに近い氣持のものとしては

こたへする聲面白み山彦をかぎりもなしに呼ぶわらはかな　山彦　下卷

を擧げ得られます。これも子どもの生活をよく觀てゐると言へませう。「かぎりもなしに」が實に生きてゐる。私はこれを讀みますと、鷗外の「木精」を思はずにゐられません。勿論、言道はフランツのやうな感慨をこの歌にこめてゐるのではありますまいけれども、無心に山彦を呼ぶ子どもの「血色の好い丈夫さうな」樣子や「喜びの色が輝」く「生の色」をたゝへた顏が見えるやうに思はれます。

何事もえかゝぬ筆を少女どちとりて遊べるつくつくしかな　土筆　中卷

さし柳さしていくかも經ぬものを根ざし引き見る友わらはかな　柳　中卷

これも同じやうな氣分を示すものでありませう。殊に柳の歌は、鼻を鳴らしならし眼をまろくして泥まみれの根つこを見てゐる子どもが浮んで參ります。また

若菜つむ友におくれてあぢきなく啼く子もまじる春の野邊かな　若菜　中卷

は「何事もえかゝぬ筆」に比して更に一層生彩がある、動的な感じがすると思ひますが、その無心の生活を氣ごらずに歌つたところが、傳統的な考へから言へば卑俗な調子と言ふべきでありませうけれども、すぐれてゐると思はれます。同じく泣く子の歌には

少女らが山のそばかる秋風にせにおふ子さへわりなくぞ泣く　山秋風　上卷

と言ふのもあります。前鉢卷の子守、はんてんで負はれ火のつくやうに泣く子、それに落莫たる秋風、この情景の自然さは尊長さるべきだと思ひます。

また泣く歌に

何ごとか遊ぶあそばぬいさかひも泣くぞ限りのわらはべの友　わらは　上卷

も面白いでありませう。手ばなしで、涙と鼻汁と汗とごちゃ〳〵にして泣く子の顔、よにも悲しい表情、たしかにこれで喧嘩はおしまひであります。

聞きすて、飯たく親の見ぬまにも聲の限りになくうなゐかな　貧家　上巻

この泣く歌は「閨に泣聲のするを目の覺むる相圖(あいづ)とさだめと記してゐる「おらが春」を想ひ起させます。おらが春と言へば、悲慘な歌に

親なけば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて　子　上巻

と言ふ(少しく理窟ばつてゐるやうにも思ひますが)のがあります。これは

親も子も打ちぞそろひてそば湯さへ霰ふる夜は哀れにぞ飲む　寒夜　上巻

夕されば わらはも老も泣くばかり雪より寒き雨のふるらむ　寒雨　上巻

なども同樣、言道自身と子どもとの生活が偲ばれませう。そしてどこかに一茶に見られるやうな痛々しさがありますけれども、決して一茶流の皮肉や、また別の見方からして「糟湯酒(かすゆざけ)鼻ひしびしに」啜つた憶良のやうな道學者流の臭のないところを注意せねばなりません。

比較的知られてゐる歌に

妹が背にねぶるわらはのうつゝなき手にさへめぐる風車かな　風車　上巻

あけぬれど親の心の闇のうちに朝いせさする家の少女子　娘　中巻

の二首があります。かう言ふ境地、殊に前の歌のやうな世界は全く從來の歌に見られぬところであつて、たしかに言道の歌のよさ、また言道自身のよさが窺はれるものであります。かう言ふよさが結局

童こそいたくほりすれくれ竹の子はこのごちの相思ふごと　竹の子　中巻

幼きもまた幼きをなつかしみ鳥の子いだく里のたわらは　わらは　中巻

の如き歌を、卒直に作らせずにはおかなかつたのでありませう。この二つには共通の要素があつて、それによつて言

道が子どもの世界と言ふものゝ存在を充分認めてゐたことが知られませう。この事は又、多少類型的ながら

けふ見れば少女になりぬ去年までは一足しても飛びしならずや　少女　上巻

幼げも早なくなれる童さへ背におはるゝや樂しかるらむ　童　中巻

に於てもみこめられると思ひます。そして

風吹けば庭の木の葉のよるばかり片すみごとにゐるわらはかな　わらは　上巻

うごめほる谷の底なる少女どもまれには峯の行きかひも見よ　村童　下巻

いくばくのおとりまさりも見えぬ子の負へる負はるゝ哀れなるかな　嬰子　下巻

の如き全く子どもそのものゝ中に入りつくした言道獨自の歌がなり立つものと考へられます。

以上の例だけについて見ましても、言道はまことに子どもの生活に深い關心を有してゐたことを理解し得ると思ひます。そして良寛や一茶や或はまた曙覽のごときに見られるのと同樣、言道自身、童心の持主であつたことは想像するに難くないのであります。前にも申しました通り、私は、子どもの歌をよくし得るものはそれ自身童心をもつものであると考へてをりますけれども、どうでありませうか。言道はこんな歌を殘してをります。

春くれて永き日さびし山彦も獨りごちだにけふはせよかし　暮春山家　中巻

わりて見るたびに面白いつ〳〵も竝べるさまのおなじさや豆　豆　下巻

かう言ふ微笑ましい歌は童心と言へませんでせうか。更にまた

知らぬまに生ひいでゝ門に竹の子のそこにて高くなる景色かな　筍　中巻

はどうでありませうか。私はこの歌を讀んで、良寛が竹の子の成長をあはれんで緣側に穴をあけてやつた話を思はずにはゐられません。恐らく、この竹が門でなく軒下にでもはえたのなら、言道もまた穴をあけたゞらうと想像するのは決して無理でも唐突でもないと考へます。さうして、こ

の歌のある故ばかりでなく、言道は實に良寛に近い性質の人であつたことが考へられます。前に一茶をひきあひに出しましたが、言道には一茶のやうな氣毒なこげ〳〵しさは見當らない、飽くまで平和な性質であつたらうと思ふのであります。

しな高きこともねがはず又の世はまた我が身にぞなりて來なまし

と言ふ歌はそれを證して餘りあるものでありませう。

つまり、かう言ふ本質が言道をして子ごもの生活を深く觀察させ、本當に子ごもになりきつた子ごもの歌を歌はせたものと思ふのであります。

暖かに溢れる日の光のもとに、お母さん方に連れられた子ども達の嬉しさうな顏、顏、顏。萬國旗、花、リボンで飾られた幼稚園の內外。藤棚の下、ばらのお家、ブランコの邊には可愛いゝお提灯のさがつたお店が出來てゐる。「子ども達が一生忘れない一日でせうね」と言ひ合つた日でした。

十一月二十九日、東京女高師落成記念祝賀會に、附屬幼稚園でも、園兒とその保護者に、舊職員、保育實習科卒業生その他の方々をおまねきして盛な園遊會が催されたのであります。模擬店の開かれてゐる間に、童話、童話劇、樂隊、大神樂等の餘興も賑やかで、青くすんだ空には「祝落成」のアドバルーンが一ぱいにふくらんでゐました。暮れようとする本校グランドに六千餘の日の丸の波が一齊に陛下と學校の萬歲を叫んだ時、その日の興奮は華やかに高潮してゐたのでした。

あんなに子ども達が喜んで……。私達はそれが本當にうれしいことでありました。

（ひかる）